カホン（木製打楽器）を用いた地域密着型木育の可能性検証

東北森林管理局　米代東部森林管理署　業務グループ　○岡部　真也
（元　三陸北部森林管理署）
東北森林管理局　三陸北部森林管理署　業務グループ　○橋本　澪佳
林野庁　国有林野部　業務課　庶務係　　長岡　圭祐
（元　三陸北部森林管理署）

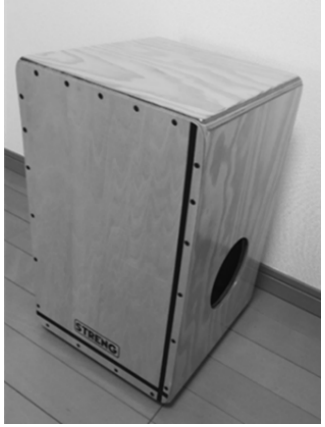
１　課題を取り上げた背景

当署の所在地である岩手県宮古市は、総面積の約９割を森林が占め、森林林業に親しみやすい環境にあります。しかし、一般的に宮古市は海や漁業のイメージが強く、地域住民が森林林業に関わる機会が少ない印象を受けます。

そこで、今回は宮古市産業まつりに出展し、地域住民に木とふれあう機会を提供するとともに、その成果を踏まえ、地域密着型木育の可能性を検証しました。

２　取組の方法

カホンという木製打楽器の、ほぼ全て木でできているという特性を活かし、子供を中心に興味を持ってもらえるものづくり体験を検討しました（写真１）。



（写真１：カホン）

カホン製作にあたっては、当署管内にあるカホン製作工房のササキ研究所より、カホン製作のノウハウのご指導を受けました。また、使用する材料等を検討する上で、合板材工場のホクヨープライウッド宮古工場に合板材の規格について聞き取りし、市販材料でカホン製作が可能であることを確認しました。それらを踏まえ、岩手県産のカラマツ合板材を主たる材料として、カホンのキットを作成しました。

（写真２：カホン製作体験の様子）

産業まつり当日に、参加者にカホン製作を体験していただきました（写真２）。また、アンケートにもご協力いただき、地域の林産業についての認識を調査しました。

３　取組の成果と考察

２８名の方に製作体験をしていただくことができ、アンケート調査では９割近くの方から「今後も木を使ったものづくりをしたい」との回答を得ました。また、参加者の約４割は木工体験をしたことがなく、カホンの音を「バチッ」と響かせることで注目を集め、興味を引くことにつながったと考えられます。

さらに、カホン製作を通して、子供が合板材を知る機会になるとともに、岩手県産材が県内で加工されていることへの理解にもつながりました。

これにより、五感を通して木材とふれあい、製作体験をする中で合板材について学び、木育における「触れる」、「創る」、「知る」の３つのステップを実施することができたと考えられます。

４　今後の展望

カホンの材料は樹種を問わないため、他の地域でも特色を活かした木材を用いてカホン製作活動ができる可能性があります。

カホン製作の五感を通して木材とふれあうことができるという特性を活かし、各種イベントに参加するだけでなく、地域の小中学校とも連携を模索し、地域材を活用した木育を継続的に実施していきたいと考えています。